

【氏名】 仲田 周子

【所属大学院】 (助成決定時) 日本女子大学大学院

【研究題目】

第二次大戦後の「日系ペルー人」の軌跡と抑留経験に関する質的調査法による実証的研究

【研究の目的】

本研究は、第二次大戦中にアメリカ合衆国へ強制収容された日系ペルー人の強制収容経験とアイデンティティの関係に着目するものである。ペルーを含む中南米諸国日系人強制収容に関する先行研究は、主に歴史学の分野で蓄積されてきている。しかし、これらの研究の多くは強制収容の歴史的経緯や背景を明らかにすることに重点が置かれ、強制収容所解放以降の当事者の経験について触れたものは少ない。

本研究では、このような状況を踏まえ、以下の二点を目的とする。一つは、第二次大戦中にアメリカ合衆国での強制収容を経験した日系ペルー人の戦後の軌跡を、経験者自身のライフストーリーを通して明らかにすること。そして二点目は、過去の強制収容経験とアイデンティティの関係を、日系ペルー人が多く収容されていたクリスタル・シティ収容所の同窓会的集団である「ペルー会」(Peru-kai Reunion)を通して検証することである。

【研究の内容・方法】

研究方法は、アメリカ、日本をフィールドとし、ペルー生まれの二世にあたる強制収容経験者へのライフストーリー・インタビューを行った。終戦当時、アメリカ国内の収容所には推定 1300 人の日系ペルー人が収容されており、このうち 900 人以上が日本へ「帰国」し、約 300 人がアメリカに「残留」したとされる。日系ペルー人にとって終戦は「強制収容の終了」を意味するのではなく、新たな困難のスタートでもあった。本研究では、過去の共有体験を基に、日本「帰国者」、アメリカ「残留者」を「日系ペルー人」として捉え、強制収容経験の意味を考察するものである。具体的なフィールドワークの内容は次の通りである。

アメリカ「残留者」については、主にカリフォルニア州サンフランシスコ、パークレーを拠点にして 4 名のインタビューを行った。また、1980 年代から行われている補償運動のサポート団体である「日系ペルー人オーラルヒストリープロジェクト」(Japanese Peruvian Oral History Project)の活動を通して、補償運動の動向や日系アメリカ人コミュニティにおける日系ペルー人強制収容の位置づけを確認した。

日本「帰国者」については、戦前にペルーへの移民を多く送出した沖縄を中心に 4 名のインタビューを行った。また、日本での補償運動の変遷をみるために新聞記事分析をすすめた。

ライフストーリー・インタビューとは別に、強制収容経験とアイデンティティの関係を

検討する試みとして、強制収容所の同窓会的集団である「ペルー会」での参与観察も行っている。「ペルー会」は、強制収容経験の共有と経験者同士の交流を目的に 1984 年から催され、参加者の多くが二世にあたる人々である。参与観察を通して、強制収容をめぐる個人的記憶や集合的記憶がどのように語られ、継承されているのか、「ペルー会」で営まれるアイデンティティ確認について社会学的に検討した。

【結論・考察】

ライフストーリー・インタビューから、強制収容経験をめぐり多様な語りが浮かび上がってきた。二世は、戦後、日本、アメリカそれぞれの社会の中で強制収容にまつわる様々な苦労を語る一方で、強制収容所を家族や友人との個人的な思い出としても捉えていることが明らかになった。このような強制収容経験の多様な側面が、過去の歴史的出来事に対する評価を曖昧にし、補償運動についての違和感として表出されていることがわかった。「ペルー会」は強制収容経験の多面性の延長線上に位置し、強制収容を経験した「日系ペルー人」の個人的アイデンティティ、さらには集団的アイデンティティを確認する場として機能している。強制収容経験は「離散」の経験とも考えられ、現実の社会において共通の国家を持たない「日系ペルー人」にとっては、唯一共有する過去の所属と経験が大きな意味を持っているのである。強制収容経験は「日系ペルー人」のアイデンティティを複雑にしているが、「ペルー会」はそのようなアイデンティティの不安定さを包み込む空間となっていることが確認された。